

西之表市国上

きしがさき
喜志鹿崎沖に沈む

旧日本軍機について

(九七式艦上攻撃機)



喜志鹿崎灯台



浦田海水浴場

■これまでの経緯

これまで地元では、旧日本軍機の不時着等に関する目撃談などが語り継がれてきた…

平成 12 (2000) 年に地元漁師から話を聞いた種子島ダイビングセンター Sea Mail の林哲郎氏は、仲間と共に捜索を開始

平成 27 (2015) 年に、ようやく機体を発見「海底の白い砂の中に、黒い車輪が見えた」



その後、林氏らは独自に潜水調査を続け、「九七式艦上攻撃機ではないか」と推測



九七式艦上攻撃機

昭和 12 (1937) 年に日本海軍に採用された航空母艦搭載用の3人乗り攻撃機。

16年12月8日の真珠湾攻撃の主力を担った。太平洋戦争末期には旧式化し、20年4月から始まった沖縄航空作戦では、串良航空基地（鹿屋市）から出撃した特攻機に多数使用された。

- 一号機…中島製 (B5N1) のちに「一一型」
- 二号機…三菱製 (B5M1) のちに「六一型」
- 三号機…中島製 (B5N2) のちに「一二型」



※日本での現存確認は、この1機のみ。アメリカ・イギリスで1機ずつ機体の一部が保存されている。

平成 30 (2018) 年

1月に、林氏から西之表市に相談があり、潜水調査に協力することで合意（平成30年度予算で、謝金や消耗品費を計上）

5月16日に調査を開始し、計7回の潜水調査を実施

コックピット部を中心に、遺骨の有無確認の作業は可能と考えていたが、

現地の海域は潮流が速く、作業できる時間が潮止まりの20分程度に限られることなどから市や民間レベルでは限界があり、国（厚生労働省）に調査を要請することに…

平成30(2018)年

6月28日～29日 厚生労働省が来島（現場確認、証言聴取など）

その際、市民から「戦時中における馬毛島への戦没者漂着および仮埋葬」の情報提供もあり、10月30日からの4日間、「馬毛島での遺骨収集事業」が先行実施された。

遺骨・遺留品の発見はなく、『馬毛島葉山王籠遺跡』の発見につながった。



令和元(2019)年

新型コロナウイルス感染症の影響などにより、喜志鹿崎沖での調査を延期…

令和2(2020)年

文化財係では、引き揚げ後の保存処理方法について、有識者らと情報交換を行ってきたが、潮流の速い危険な海域、機体の劣化状況、保存処理の長期化などを総合的に考えると「遺骨収集調査だけ海中で行い、機体は現状保存がベスト」という判断に…



令和3(2021)年

3月9日～15日

世界で活躍されている水中考古学者、山松晃太郎氏による

フォトグラメトリ講座を開催

※数千枚もの写真を、360度あらゆる角度から撮影し、コンピュータで共通点を探し出し、合成することで、3Dモデルを作成する。出来上がった3Dモデルは、様々な角度や距離に動かし見ることができる。さらにサイズ計測も可能。



※海底で、
ひっくり返った状態の機体

令和3年6月14日～27日（14日間）

『喜志鹿崎沖に沈む旧日本軍機周辺の遺骨・遺留品調査及び収集派遣』

調査団：日本戦没者遺骨収集推進協会（会長：尾辻 秀久 参議院議員）

厚生労働省・遺骨鑑定人

調査協力：西之表市・国有財産管理庁・藤田建設興業（潜水作業実施業者）



▲喜志鹿崎灯台から作業を見守る住民ら



▲クレーンで引き揚げられた機体



▲主翼（左翼）



▲尾翼（水平尾翼と後輪）



▲遺骨・遺留品調査



▲発見された鉛筆

天候不良により調査期間の延長はあったが、調査団は無事に機体引き揚げを完了した。西之表市は、遺骨確認や機体特定の作業支援を行った。今回の調査では、遺骨ならびに機体特定につながる部位の確認はできなかったが、鉛筆や工具のほか、無いと思われていた尾翼部分が見つかったことは、今後の詳細調査に期待がもてる結果であった。

機体は、大分県宇佐市（かつて搭乗員を養成する宇佐海軍航空隊があった）が取得の意志を示しており、保存処理・詳細調査を行った上で、展示活用を目指す。宇佐市とは、平成30年から交流を図っており、今後も情報共有することで、合意している。